



標高2704メートルのポアス火山は、サン・ホセからも近く人気の観光地だ

環境立国に隠された現実
熱帯植物に囲まれた道を歩くことと数十分。突然、目の前に壮大な噴火口が現れた。噴煙の先には、神秘的なエメラルド色をした火山湖が広がり、思わず言葉を失う。

ここは中米の国、コスタリカにある「ポアス火山国立公園」。エコツーリズム発祥の地として、近年、注目を集めるこの国では、さまざまなツアーを通じて自然を満喫することができ。ポアス火山もその一つだ。この日も、フランス、ドイツ、インドと世界各国から観光客が訪れていた。

実は、コスタリカが誇る豊かな自然には、日本の協力が一役買っていることをご存知だろうか。その取り組みを取材するため、3月下旬、ようやく桜が咲き始めたものの、まだ肌寒い日が続く。東京を飛び出した。現地の空港から一歩外に出た瞬間、暖かくて心地よい空気に包まれる。そこから首都サン・ホセの街に向かう道中、早速、いくつもの自然公園を目

にした。しかし、そんなコスタリカでも森林の存続が危ぶまれたことがある。1940年に国土の75%の面積を占めていた森林面積は、農地や放牧地の開墾によって、87年には21%にまで減少。その後、ガソリン税を通じて森林保有者に対してが支払われる制度や、植林を行った地主に補助金が支給される制度など、数々の先駆的な政策が成果を上げ、森林面積は50%以上に回復した。ところが、こうした取り組みによって別の問題が引き起こされていたことが明らかになる。

「行政担当者が、森林伐採や狩猟に対する取り締まりの強化だけを重視したことにより、住民との間にあつれきが生じるようになりまし」こう指摘するのは、大澤正喜JICA専門家だ。コスタリカでは、国土の4分の1が自然保護区に指定されている。保護区の中には、一部、人々が生活する居住地が含まれているにもかかわらず、まるで人間活動を排除するような管理が行われていたのだ。この問題を解決するのにつけてのパートナー、それが日本だった。「日本には、小笠原諸島や阿蘇のように、ほとんどの国立公園で人々が生活しながら自然環境を守ってきた経験がある。そのノウハウを生かそうと始まったのが、『住民参加型』の管理プロジェクトです」。

住民と向き合い続けた一人の日本人

大澤専門家は、プロジェクトのチーフアドバイザーとして、自然資源の管理を担当する現地の行政機関、通称「SINAC」の職員とタッグを組み、環境のモニタリ



SINACの職員に、これまでの取り組みについて説明する大澤専門家(今年2月)。プロジェクト開始当初、日本人は大澤専門家ただ一人だったという



from コスタリカ
Costa Rica

自分たちの国の自然を、
自分たちの手で守る

環境立国として有名なコスタリカ。自然環境を守るために行われてきた数々の政策の裏で、住民はある深刻な問題を抱えていた。そこで取り入れられたのが、住民が保全活動に参加する新しい発想だ。

写真(9ページの専門家の写真を除く) | 今村健志朗(フォトグラファー)



さまざまな野鳥が生息するバラ・デル・コロラド地区では、生態系の変化を調べるため住民もモニタリング活動に参加。運がよければ、頭と首が黒く、非常に珍しい「ハビルー」に出会えることも(中央の鳥)

野生生物の生息域を調査するためにカメラトラップを仕掛ける。夜間にはビューマも確認されたという



リンダ・ビスタ村で行われた研修で、村の開発方針について議論。観光開発が進んでいる地区の視察も行った



人が暮らしている。「この住民たちは、積極的に保全活動に取り組んでいますよ。出迎えてくれたのは、一昨年からのこの地区で活動している菊地格夫 専門家だ。まず、農業を営むマリア・

ルイサさんの畑に向かった。「これはキャベツ、こっちはネギ。コシヨウの栽培も始めたのよ」。到着してくれたマリアさん。有機栽培にこだわり、農薬は使っていない。また、牛や豚のふんを発酵させ、調理用として使えるガスを発生させる「バイオガス・ダイジェスター」を取り入れている畜産農家もいる。さらに、菊地専門家は「自然環境や生態系のモニタリングも行っています」と、一台のカメラを指さした。地区に生息する生物を24

時間観察するためのもので、全部で20台設置されている。また住民自身も、野鳥を観察して記録する活動を行っていて、「自分たちの地区の自然を守っていく」という意識が高まっているようです」と菊地専門家は笑顔を見せる。こうした取り組みが定着しつつある背景には、SINACの職員が存在が欠かせない。その一人が、環境教育を担当するアナ・マリアさんだ。初めの頃は、「集まりに参加すると水道を止められる」など人集めに苦労したというが、「子どもたちが何に興味を持っていいのか探しながら回数を重ねるうちに、環境教育のクラスに少しずつ人が来るようになり、さらにクラスで伝えたことが、子どもから大人へと広がっていききました」とアナさんは話す。

環境分野で世界のリーダーを目指す

今後の目標は、環境保全を経済の発展につなげ、持続可能なものにする事だ。マリアさんが暮らすリンダ・ビスタ村では、住民がコンサルタントと共に農村開発やマーケティングに関する研修を重ねた結果、

「観光」を軸に村を発展させていく方針がまとまった。オーガニックな食材を使った料理や、自然を活用したツアーなど、面白いアイデアが生まれている。チーズ工場と連携し、質の高い乳製品を売り出していく方針を掲げる村もある。マリアさんも、「この地区にはいろんな種類の鳥が生息しているので、多くの人に見に来てほしい」と期待を込める。「何よりも地域住民と一緒に取り組むことが大切。環境分野の国際的なモデルとなって引張っていきけるように、さらに推進していきたい」とSINACのフリオ・フラード・フェルナンデス長官も意気込む。モデル地区での経験や、他の保護区、さらには国外に共有していくことも、今後の重要な課題だ。これまでさまざまな国際会議の場でプロジェクトの成果を発表してきたほか、中米諸国を対象にしたセミナーも開催。その担当を務めた小川啓子専門家は、「環境保全はこの国でもテーマになっている。この取り組みをきちんと知識として取りまとめ、発信していきたいです」と話す。多くの観光客を引き付けてやまないコスタリカの自然。その保全に向け、国と地域、そして住民が一丸となった取り組みが、これから世界に広がっていくことが期待されている。

SINACのフリオ・フラード・フェルナンデス長官。気候変動問題の観点からも、国を越えた取り組みが必要だと話す



ングや啓発活動、セミナーの開催などに取り組んでいる。サン・ホセにほど近い事務所を訪ねると、その隣に、生物多様性研究所（INBio）と名付けられた施設が建っていた。「国内に生息する生物の標本や目録を作っているNGOです。湿地帯を再現した国有の公園の管理も行っています」と大澤専門家。せっかくなので、案内してもらったことにした。

公園の中では、イグアナやチョウ、ヘビといった多種多様な生物を見る事ができる。しばらく進むと、モララ村から来た小学生たちが、ガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。「ナマケモノには指が3本しかないんだって」と男の子が目を見張らせている。大澤専門家は、「コスタリカは環境教育も盛んで、ここは学習の場として使われることが多いのです」と説明する。

そんな大澤専門家自身は、小さい頃から大の釣り好きで、それが高じて環境分野に興味を持ち始めたとという。「釣りの雑誌を読むと、昔はよく釣れた」という記述をよく目にするので、それなら昔の環境に戻したい」と思ったのです。また、20年ほど前に青年海外協力隊としてパナマで生態調査の活動を行い、自分の力不足を痛感したこと、中米の環境保全に携わりたい」という思いが強くなりました。

少しずつ変わってきた住民の意識

サン・ホセから車を約3時間走らせた、ニカラグアとの国境付近にあるバラ・デル・コロラド野生生物保護区。プロジェクトのモデル地区となっている場所だ。湿地帯ならではの珍しい生物が数多く生息するこの地には、約2500



「バイオガス・ダイジェスター」を導入した住民を訪れたアナさん(左)。日頃から住民とのコミュニケーションを大切にしている

イグアナを間近で見ることができる



子どもたちの学びの場としても活用されているINBio公園。ツアーの参加者が、事前に知識を得るために訪れることも

